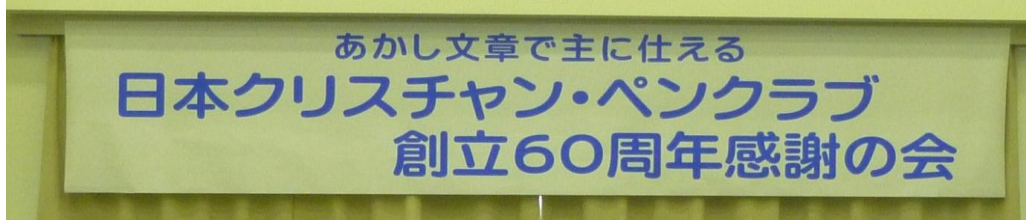




文は信なり

日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)

発行責任者 池田勇人 事務局:〒131-0043 東京都墨田区立花 4-6-13 三浦喜代子方
TEL&FAX 03-3616-8621 郵便振替 00170-0-161838 HP: <http://jcp.daa.jp>



心に届くことば

理事長 池田勇人



今私を支えて
いる二つの詩が
あります。一つ
は晴佐久昌英師
の「病氣になつた
ら」(「恵みのと
き」サンマーク出
版です。

病氣になつたら
どんどん泣こう
痛くて眠れない
といつて涙ぐみ
死にたくないよといつて
めそめそしよう
恥も外聞もいらぬ
いつものやせ我慢や
見栄の張りを捨て
かこわるく涙をこぼそう
またとないチャンス
もらったのだ
自分の弱さを
そのまま受け入れるチャンス
「またとないチャンス」が、二連では

「思いやりとまごころに触れる」三連では「いのちの不思議を味わう」、四連では「試練がみんなを結ぶ」、五連では「信じるよろこびを生きる」、六連では「まことの親に出会える」恵みのときだと展開されて、病者の視線が素直に上向きになって行きます。

もう一つの詩は「いのちより大切なもの」星野富弘です。
いのちが一番大切だと
思っていたころ
生きているのが
苦しかった

いのちより大切なものが
あると知った日
生きているのが嬉しかった
友の祈りに執り成されているのに、
体の痛みや気分の悪さで一喜一憂し
もつと悪くなつたら…と恐れる。その
生き苦しさの中で、「いのちより大切
なもの」のコトバが、病む者の心に静か
に降り注がれ、沁みていきます。
主よ、私にも人の心に届くこと
ばをお与え下さい。

六十周年開会あいさつ・挨拶

理事 三浦喜代子

五年前に、この同じ場所で五十五周年をお祝いしました。そのときにお越しくださった方々と再びお会いでき感謝でいっぱいです。しかしお顔を見ることのできない方もおられます。玉木功先生が昨年召されました。また、久保田暁一先生、川上与志夫先生は体調のご都合で本日は欠席です。その他、ご高齢になられて出席の無理な兄弟姉妹も多くおられます。

しかし、こうした諸先輩の力強い祈りと努力の積み重ねによつて、今私たちが歩いている『あかし文章』の道があることを忘れてはならないと思います。今なお私たちの脳裏に鮮明な記憶を刻んでいる満江巖先代理事長の偉業を含めて、本日はその六十年を思い起こすときでもあると思えます。さらに、神様は私たちに明日に向かつて『あかし文章』を書き、広めよと励ましておられる、その貴い使命を確認し、確信し、立ち上がる時でもあると信じます。

十月六日 JCP 60 周年
記念講演要旨

遠藤周作の信仰と文学

黒川知文先生（愛知教育大学教授・文学博士）

人の才能は、遺伝と環境によることが多い。彼は遺伝的には優れていたが、環境的には難があった。彼の環境が弱者の立場がわかる彼を、築いたのかもしれない。少年期に母の通うカトリック夙川教会に通い洗礼を受けている。母のひと言。「小説家になつたらいい」が、後の彼に影響を及ぼしている。

遠藤周作の信仰は、カトリック信仰であった。ローマ法王との謁見での感想には、「あなたはお辛いでしょ」と、私は言いたい衝動にかられたとあり、現代の中で、傷つきよるめいている基督教の苦しみ、まるで法王



た。しかし、そうした試みがすべて失敗に終わったのは、

さまのなかにあるように私は感じた」とある。

母の信仰をうけつぐ周作氏は少年時代が終わると、様々な疑惑や疑問をキリスト教に持ち始め、離れていたところか、キリスト教を捨てよう

母親に対する愛着と、少年時代に対するなつかしみからにすぎない」と、「異邦人の苦悩」（一九六三年）などに記されている。「母が与えてくれたにもかかわらず、背丈に合わぬものとの闘いを語りたかった。」

そう書けば、大多数の日本の読者は私がどこまで基督教に信頼や確信をもっているか疑われるだろう。私ははつきり答える。私は基督教の教えが他の諸思想より私には一番ふかい一番たかい真理だと考えている。基督教の教えに対する信頼感私の心の底に今日あるのだ。小説を書けば書くほど私には基督以外に自分の人生の指針や目標を考えることはできなくなってきた。小説を書けば書くほど彼を信じてきたし、その信念は今のところ当分、ゆるがないように思える」とある。（私の文学）一九六七年

遠藤周作の文学論として、彼は文学者と宗教者とは対立せざるをえない場に立たされていることをおわかりいただきたいと、言っている。もし、信者として純粹を固守するため、真実の人間を描かなかつたら、作家としての誠実さを捨てたことになる。その余白の世界こそ、神の手に委ねる部分である。もし、基督教が本当の宗教ならば、それは人間の内部の一部だけに反響するのではなく、人間を形づくっている全体的な世界にたいして交響曲を響かせる筈であるとも言っている。

小説家の使命は、魂の劇、すなわち人間とそれを超えたものとの関係を描くことで、人間内部の存在的渴望にまで錘をさげて魂を探索することだと述べている。

（参加出来なかつた方々のために講演と資料からまとめたものです。編集子）

夏目漱石の文学と聖書

大田正紀先生（梅花女子大学教授）



夏目金之助は、幼少から漢籍に親しみ、大学予備門に入る前には、二松学舎で陽明学や漢文学を学びました。落語通いが縁で正岡升（子規）と親しくなり、俳句や漢詩を詠み手紙を交わしました。漱石（へ

そまがり・頑固者）という号は、子規宛の手紙ではじめて使いました。帝国大学・大学院で、英文学を学びましたが、将来の進路や結婚話のもつれから、突然四国松山中学校の先生になります。『坊っちゃん』のなんともイヤミな「赤シャツ」こそ自分がモデルだったと本人も述べています。わずか一年で熊本五高に移り、妻鏡子を迎えます。

やがて文部省から「英語学を学ぶように命じられ、イギリス留学に向かいます。「文学とは何か」ということが分からなくなり、神経衰弱になったほどです。その苦闘の中で、「自己本位」「個人主義」を手に入れました。一番の悩みは当時のエゴイズムの対立と和解を描く英文学と、その確信にあるキリスト教の「神」が分からないことでした。

漱石は、帰国後第一高等学校と東京大学で英語・英文学の教師になります。『ホトトギス』に「吾輩は猫である」「坊っちゃん」を連載して、好評を博します。『草

枕」などの美的趣味の作品も評判でした。

漱石は、東京帝国大学英文学教授につくことが半ば期待されていたのに、突然当時アンチチャン新聞と揶揄されていた「朝日新聞社」の専属小説家になり、『虞美人草』を連載します。漱石の中期の作品に『三四郎』『それから』『門』があります。寺田寅彦や小宮豊隆や森田草平らがモデルです。学問・職業・結婚などの選択に悩む青年、人妻への愛の告白、日陰者の下級官吏夫妻。ロマンティックな恋愛と結婚を描いたといわれる作品ですが、実は、旧約聖書のサムエル記と詩篇を読み、「愛のない結婚の罪」「罪ある結婚への裁き」がテーマに据えられています。

エゴイズムの葛藤から自殺に追い込まれる真面目な人間を描いた『ころ』の連載後、漱石は随筆『硝子戸の中』を書きます。この連載の途中から漱石は自分の幼少期の思い出を書き始めます。そして唯一の自伝小説『道草』を書きます。過酷な幼少期と「いらぬ子」のトラウマになった出来事を辿り、帰国後数年に亘った「金」にまつわる夫婦・親族の対立・葛藤です。

ただ、理想を持たない自然主義の作家たちと違うのは、漱石がこの作品で主人公に「神の眼」を意識させ、相対化させている点です。人生を振り返る視点に影響を与えたものは、『聖書』とアウグスティヌスの『告白』です。倫理的な「裁き裁かれ」から宗教的な「赦し赦され」への世界観の展開が見られます。「則天去私」も死の直前の感慨や悟りと言うより、中・壮年からの文学・思想の中心にあつたものと考えの方が良いと思います。英訳すれば、そのまますぐに同時代の英文学と同質・同格の作品となっていました。キリスト教の肝腎に「贖罪」と「復活」があることを知っていました。



みんなで練り上げたプログラム

弾き歌い
高らかに
ひびいた
讚美の
ソプラノ
山本千晶姉



囲いの中に属さないーまだ救われていないー人たちのために、神の愛を伝えていきたい。美しい日本語で、今日一日のいのちを、感謝してー。

池田勇人理事長の開会
礼拝メッセージから。

各地の参加者からのご感想です

関西

アドナイ・エレ 小川 恵子

突然に神さまから文書伝道への召しを受けたときは途方に暮れました。すぐに二〇〇一年のJCP夏期学校に導かれ、立ち上げられた関西ブロックに入会しました。以来、久保田先生、大田先生のご指導を受けております。中部の玉木先生より伝記小説を書くように勧められ、関西の奥村先生のお世話で月刊誌に連載が始まりました。間もなくお二人とも相次いで天に召され、寂しい思いです。

記念会の前日、取材のためI牧師をお訪ねしました。何と玉木先生と四十年ものお付き合いがあったそうです。アドナイ・エレ「主の山に備えあり」と、神さまが備えて下さることを知り、使命を再確認いたしました。充実した「創立六十周年の記念の集い」に参加させて頂いた恵みを感じたいです。世の移り変わり、人の入れ替わり、お互いの変化はあっても、主の御業はこれからも続くことを信じ、心熱くして帰路に着きました。

書く祝福 藤本 優子

JCPの仲間、人口のパーセントにも満たないクリスチャンの中の、これまた一パーセントにも満たない者に白羽の矢を当てられた人々の集まりです。その中に私も加えられていることを改めて感謝しまし

た。

六十周年記念の集いでは闘病中の池田先生から直接メッセージを賜り、もう一度明確な文書伝道のビジョンを与えられて、私にとっても忘れられない記念日となりました。

そして、志を同じくするペンの仲間たちとの交わりがどんなに大切であるかも分らせていただきました。同時代に生きる私たちが、そして、J C P が時代を超えて豊かに用いられるためにも、今後も一、二年に一度は集まって励まし合いたいものです。

J C P に所属して二十五年。その間に五、六年間のブランクがあり、中々上達しない筆力に気持ちが悪くなる時もあります。しかし、書くことで自分自身の信仰が練られ、神さまがどこかで用いてくださるかもしれません。それが書く者に注がれる大きな祝福です。持ち時間が見えてきた今、いよいよ熱心に書き続けていきたいと思えます。J C P の皆さんに励まされながら。

良い刺激となった一日

宇野 繁博

良い文章を書くために、良書を多く読むことの大切さをとても強く感じました。有名な日本文学と世界文学のイントロクイズではほとんどわからず、いかに自分が無知であるかを感じました。

夏目漱石の坊ちや



んという書籍は知っていても、どの様な内容かと問われたら説明ができません。これからゆつくりと読んでいきたいと思いました。

午前の講演の中で遠藤周作のことが語られました。人間は遺伝と環境と応答で人生が決定されるとあり、遺伝や環境は自分でコントロールできなくても、神の応答は選択できるというお話に感銘を受けました。

初めての方とも多くお目にかかることができ、感謝でした。関東ブロックの方々の証し集もこれからゆつくり読ませてもらいます。とても良い刺激になった一日でした。

感謝の集いに参加して

松本瑞江

東京・御茶ノ水の会場に入ると懐かしい顔、顔、顔。笑顔に迎えられる嬉しく思いました。日本クリスチャン・ペンクラブ池田勇人理事長は、力強いメッセージをしてくださり、とても励まされました。本当にありがとうございました。ございました。どうぞ、お身体を大切になさってください。

講演「黒川知文師の『遠藤周作の信仰と文学』、講演口大田正紀師の『夏目漱石の文学と聖書』、あらためて重みを感じました。私は最近、本をきちんと読んでいないことを痛感しました。黒川知文師の『文章作法の学び』の講義も有意義でした。

私は戦前七歳まで東京の中野区に住んでいたのです。この「感謝の集い」に参加して、書きたいこと、訴えたいことが、幼少時代の思い出と共に湧いてくるのを覚えます。

J C P 六十周年記念会に参加して

原田 潔

作品の冒頭の書き始めがとても大切です。内外の



な一指摘を頂き、読者をして興味をひきつける技を指摘して下さった黒川先生の流暢なお話は、聴く者にとって魅力溢れるものでした。

六十年の歴史の中で書くことを赦され、与えられた一頁が、諸先輩たちによって培って来られた伝統の中で育まれ、強められている喜びを、実感し、感謝せずにおられない感動を覚ええました。

綿密な計画のうちに、この会を準備して下さった諸兄弟に深い敬意を表し、身に余るご講演をいただいた先生方に御礼を申し上げます。主にあつて。

創立六十周年の感想と詩

奥西まゆみ

主の御名を讚美申しあげます。いつもお世話になっております。

十月六日(土)はありがとうございました。聖霊に満ちあふれたすばらしい会でした。参加してよかったです。

急に参加してすみませんでした。あふれる祝福と平安をお祈り申しあげます。主において

六十つぶの真珠のネックレス

真珠が静かに

落ちていく
ひろつてくださる
かみさま
つないでくださる
かみさま
あなたから
いただいた
このいのち
かみさま
あなたに
おささげします
このちいさな
いのりとともに
アーメン

東北

岩手から二十年ぶりの参加 佐藤 昭子

約二十年前、満江先生がご健在の頃、私は池袋での月例会で皆様に大変お世話になりました。当時は横浜に住んでおりましたが、現在は岩手の山間の町に夫と静かに暮らしております。

昨年の東日本大震災で私たちの町にも被災された多くの方々が移り住んでおられます。キリスト教超教派のボランティア団体、クラッシュ・ジャパンによる支援を受けて、仏教や神道の根強い土地柄のこの地にも神様の深い憐れみが豊かに注がれているのを感じてはいられません。私たちに与えられた余りある主の恵みを、まだイエス様を知らない多くの人たちに証しする機会



を待ち望んでいます。

親交のあつた兄弟姉妹の方々の死に直面して自分の人生を再確認したり、自らの信仰の軌跡を残したいと、私に残された年月を逆算しながら、身近な暮らしを題材にした証しをすべく、ペンを執る再決心を致しました。神様の愛によつて一人でも多くの人が救われるようにとの希望に、心を燃やされ、感謝いたします。

関東

涙あふれて……創立六十周年記念

感謝の集い 石垣 亮二

・元氣になつて凱旋された池田勇人理事長
なんと二年ぶりに病から敢然と復帰された池田先生、難病と戦い現在も深く静かに神を見つめながら療養を続けておられる先生の凛としたお姿に、会員の全てが感激と喜びに満ち溢れて、涙あふれたことでした。

・記念講演を担当くださった黒川先生、大田先生

お二人ともJCPにはなくてはならない特別な先生。遠藤周作・夏目漱



石、内容の素晴らしさ
はもとより配布された資料の恵みに感謝したことでした。「文章作法の学び」も目からウロコのような感動でした。
記念出版「喜怒哀楽」
待望の会員作品集がこの「感謝の集い」に間

に合つて出版された。なんと嬉しいことでしょうか。多くの文章指導者・仲間での作品批評会・諸先輩などにお世話になり鍛えられて、今までにない個々の作品の出来栄えは、素晴らしいものです。この作品集を手にとつて読まれる多くの方々に、神様はきつと恵と幸せを与えてくださること信じます。

JCPの文章活動に「ハレルヤ」

三浦喜代子事務局長(お茶の水聖書学院講師)と運営委員のみなさん、本当に有難うございました。これまでの目に見えないたくさんのご苦労と思いやりとそして忍耐強いご奉仕を思うと、また感謝の涙が溢れます。今後ともJCPの文章活動に「ハレルヤ」。

心配事は杞憂に

山本披露武

心配なことが山ほどありました。池田勇人先生のご病気のこと、計画通り三十名の出席者が与えられるだろうかということ、作品集「喜怒哀楽」を六十周年の集いまでに出版できるだろうかということ、その他にも、費用のこと等心配なことが山ほどありました。

が、総ての心配事が杞憂に終わり、関西からも中部からも、ずい分たくさん兄弟姉妹が出席してくださいるなど、予定数を遥かに超えた四十六名もの参加者が与えられ、実に盛大な「感謝と記念の集い」となりました。

池田先生も力強いメッセージをして下さいました。黒川知文先生も大田正紀先生も、大変素晴らしいご講演をして下さいました。それだけではありません。山本千晶姉の特別讚美もよかったです、長谷川和子姉のリフレッシュ体操?も中々の好評で、主の導きと守りを強く感じながらの、感動と喜びに満ちたほんとうに素晴らしい記念の集いを持つことができ、心から感

謝しています。

さらなる飛躍を

駒田 隆

JPC六十周年記念と感謝の集い、おめでと〜ございました。また、運営にあたられた事務局の方のご苦勞に感謝の意を表します。

特に、病後まもない池田理事長のお話を聞けてよかったです。また、大田先生、黒川先生を通して有益なお話を聞くことが出来ました。両先生とも詳細なプリントをいただき、理解にどんなに助かったことでしょうか。ただただ感謝です。

諸先輩のおかげで六十を経過することが出来ましたが、これからは、わたしたちが、次の世代にこの成果を引き継いでいかねばなりません。わたしたちの努力が大いに期待されております。そのためにも、イエス・キリストの恵みを、言葉を通して、伝えねばならないのです。さらなる飛躍をめざして。

密度の濃い六十周年祝会

北川 静江

お日よりも良く感謝でした。中部、関西、東北地方からも出席された方がいて、会場溢れんばかりの祝会でした。最も嬉しかったのは池田理事長のお元氣な姿にお会いできた事です、更に癒されますように。

黒川師の「遠藤周作」、大田師の「夏目漱石」について貴重な講義が聞けて良かったです。お弁当も美しく味も良く、祝会にふさわしい御馳走でした。



文章作法は密度の良い学びでした。でも、冷や汗をかいたのは最後のクイズ、出だしの文章で、小説の題名と作者の名前を書く、私はいかに名作小説を読んでいるかを知り、少し落ち込みました。数年ぶりにお会いできた方々が懐かしかったです。

「喜怒哀楽」素晴らしい証し集が短い間に出来上がり、本の製作と今回の祝会に奉仕くださった方々御苦勞様でした。主を崇めます。

『ハシヤマイム』の添削文を読んで

青葉 亜樹子

黒川知文先生の資料にありました先生の作品『ハシヤマイム』の添削原稿を読ませていただきました。私はまだ、四百七十九枚という大作を書きあげた事はありません。神様に導かれて入会して間もない者です。まず、表紙に記載されている黒川先生の略歴を拝見し、こんなにも偉い大先生が著作をしても添削の余地があるのか、添削する方の基準とこんなに違うものなのかをまざまざと思い知らされ、驚愕しました。わずか四百字なのに、私の文章などは何度見直しても、埒が明かないときがあります。添削する方の、長文を読みこなしてく力を知るにつけ、まず読むことの大切さを感じ知らされました。

また、この貴重な原稿を提供してくださいました黒川先生に深く感謝します。長文に挑む時の参考と励みとして大切にさせていただきます。

『喜びの日』

長谷川 和子

運営委員会が何度も話し合い準備を重ねて十月六日、『JCP 60周年感謝記念の集い』を迎えた。池田勇人理事長ご夫妻、講師の大田正紀師、黒川知文師は

奥様同伴、外部から六名、中部、関西ブロックからも多数参加され、私たち関東会員は喜びに満ちて皆様をお迎えした。一同協力し、甲斐甲斐しく働いて会を進めることができた。病と闘っておられる池田先生のご出席は私たちに勇氣と書く意欲を与え、メッセージの中に希望の光を見出した。黒川師の「遠藤周作の文学と信仰」『文章作法の学び』、大田師の「夏目漱石の文学と聖書」はよい学びとなり、山本千晶姉の歌声は一気に会場を盛り上げ、喜びの波が広がった。

関東ブロック会員の作品集『喜怒哀楽』の出版を記念して、一同に贈呈した。主を証しする者として、今後とも文書伝道に励む群れでありたいと願いつつ感謝な一日を過ごした。

編集後記

★編集者たちの筆の振るいどころもないほどたくさん記事が寄せられ、26号は圧巻になりました。過ぎし恵みの日を思いだしながらお楽しみください。また、陰で祈り支えて下さった多くの皆様に篤くお礼を申し上げます。

まもなくクリスマスです。皆様の上に人となられたイエス・キリストの恵みとまことが満ちあふれますように。

★喜びのご感想に溢れる増ページとなりました。写真その他のご協力にも、感謝申し上げます。(編集者)

60周年会計報告書(円)			
(収入の部)		(支出の部)	
参加費	225,000	支出	414,064
献金	200,330	残金	11,266
合計	425,330	合計	425,330